

アジア太平洋戦争期日本の戦争遂行に対する合意形成の様相 ——アニメーション映画『桃太郎の海鷲』と『桃太郎 海の神兵』の考察

鈴木 一史

序章 問題の所在

本稿では、アジア太平洋戦争⁽¹⁾期の日本において作られたアニメーション映画を取り上げ、他のメディアにおいて反復・強化されていたイメージと併せて考察し、そのイメージが人々に何を訴え、どのような期待や価値観を抱かせるものであったのかを明らかにする。具体的には、『桃太郎の海鷲』（『海鷲』と略記）と『桃太郎 海の神兵』（『海の神兵』と略記）を比較する。1943年と1945年に公開された両作品は、海軍省後援で製作され、実際に行われた戦闘を下敷きにしているという共通点を持つ。また、前者は戦局が比較的悪化していない時期、後者は終戦直前の時期に作られたという相違点がある。双方を比較する事で、戦時下の人々の価値観の変遷と表象との関係性を導き出すことが可能となろう。

あるイデオロギーが社会に浸透する際に、支配者の強制だけではなく、被支配者の同意が必要ならば、戦争遂行に関わるイデオロギーもまた同様である。国家が国民に対して戦争遂行の同意を取り付ける時、常に強制的な方法を取っていたのでは国家は成立し得ない。多少の幅があっても、戦争遂行という一定の方向へ向かう事が重要なのであって、それでも国家の方針に異を唱える者が存在する時、初めて国家による暴力的な統制は行われた。又、民衆の側も、たとえ内心では確信を抱いていなかったにせよ、死を受け入れて意義付けし、正当化する為の論理を必要としていた。それは同時に、絶えず国家の為に犠牲にならなければならないという雰囲気醸成された事も意味する⁽²⁾。ここに、暴力的ではない形で継続的に戦争遂行に対する国民の同意を取り付けたい国家と、戦争に協力する為の「正当」な論理を欲する民衆が存在する。両者の媒介項としての役割を担うのが、アルチュセールの言う「国家のイデオロギー装置」⁽³⁾であり、メディアであるといえよう。ここに、当時の様々なメディアを分析する意義が存在する。

無論、全ての人々が同じ価値観を持っていた訳ではない。しかし、イデオロギー装置によって同一のイデオロギーが浸透していたならば、戦争に関する共通の理解、価値観の共有は行われたと思われる。人々は日常生活の中で新聞やラジオ、雑誌などの戦況報道によって、バイアスがかかった形ではあれ「真実」を認識し、映画や小説などのフィクションに接する事で「物語」を楽しむ。その受け止め方は当然異なるが、事実の解釈がその時代

の状況や価値観から離れた形で行われ得ない以上、解釈は一定の範囲内に限定される。その範囲を突き止める事で、当時の人々の戦争遂行に対する合意形成の様相が見えるだろう。

第一章 先行研究における課題

アジア太平洋戦争についての近年の研究動向として最も注目すべきは、総力戦体制論、総力戦と現代化に関する議論であろう。詳細は森武麿の論考⁽⁴⁾に譲るが、端的に述べるなら、戦時中、あらゆる分野で戦争遂行のための動員が行われ、そのことが戦後社会、ひいては現代社会まで引き続いているということであろう。

この論点は、戦争を異常な事態として学問的な検討課題から切り離すのではなく、現代に直結する問題設定として捉えている点で、戦争を考える上で有効な視角になり得る。しかし、総力戦体制の成立と現代化の側面に目を奪われすぎるあまり、戦時下の状況そのものが考察の対象から外されてしまう陥穽も存在する。戦時と戦後の連続面にのみ目を向けると、その事象が持っていた固有の歴史的位相を捨象してしまう。考察されるべきは、総力戦体制が構築されたという結果ではなく、そこに至る道筋が如何なるものであったかという過程である。ある歴史的事象の作為性を指摘しただけで、超越的な視点を得たと認識するのは誤りであろう⁽⁵⁾。総力戦体制の出現を述べるだけでは、その連続性の先にある現代社会に対するオルタナティブになり得る言説は紡ぎ出せず、現状是認の言説と同様の布置となってしまう。求められるべきは、総力戦体制そのものではなく、その媒介性の質なのである⁽⁶⁾。

本稿で取り上げる『海鷲』、『海の神兵』についての先行研究は⁽⁷⁾、「プロパガンダとして成功したか否か」という視点が主であり、失敗した作品（興行収入が悪かったという事とほぼ同義）については、「結局は失敗したのだから意味は無い」と切り捨ててしまっている傾向にある⁽⁸⁾。しかし、上記の様な成功か失敗かといった二分法で作品を分析する手法には疑問が残る。いかなる作品にも、その当時の価値観を示す内容が盛り込まれているからである。その内容自体を他のメディアと対照させ、当時の固有の価値観を見出していくという見地に立てば、プロパガンダとしての成功／失敗といった評価とは別の次元で議論を深めることができよう。

このことは、前述した総力戦体制論の課題にも対応する。他のメディアとの関係の中で共通して現れたイメージを提示することで、如何なるイメージが戦時期において反復され、総力戦体制下において戦争の正当化・正統化を図る媒介として流布したのかを明らかにす

ることができるだろう。それは、結果としての総力戦体制ではなく、過程としての総力戦体制を明らかにする一つの実践例になり得るものである。

この点を踏まえ、本稿では二作品の表現について、他の作品や他の媒体の表現を比較し、当時の人々の解釈可能性を探っていくというアプローチを取る。

その前提として、新聞に掲載された広告を分析し、どの様な点が強調されていたかを抽出する。新聞広告は、作品を解釈する側に対してスチュアート・ホルの言う「優勢な意味」⁽⁹⁾を提供し、読み手がその意味の範疇において作品の解釈を誘導する媒体である。当時、全国的な購読者層を持つ新聞が果たす役割は非常に大きかった。戦争の長期化によって、戦争報道に対して人々は関心を寄せざるを得なくなり、読者層は厚みを増すと同時に、部数も増加した⁽¹⁰⁾。マスメディアは、社会における多数派の価値や規範が再生産されていく場であり⁽¹¹⁾、特定の事象についての解釈や認識は、最大公約数的なものへと回収される⁽¹²⁾。当時の人々の多数が見た可能性が高く、且つ「国民世論を戦争へ動員する演出者として機能した」⁽¹³⁾新聞の中の広告を調べることで、分析対象の作品の「優勢な意味」を析出できよう。

次に、新聞広告で頻出したイメージと共に、当時のグラフ雑誌である『写真週報』も使用して内容分析を行う。無論、政府が発行主体となった媒体である以上、国策というフィルターを通した形での選択がなされているだろう。しかし、それも含めて当時の人々に対して浸透していた価値観を知る上で有用な資料であると考えられる⁽¹⁴⁾。

なお、史料引用の際には、旧漢字を適宜、現用字体にして行う。

第二章 新聞広告の内容検証

本章では、新聞広告を分析し、映画のどの様な部分が重要視されていたのか、或いは如何なるイメージで受容され得る可能性があったのかを探る。対象新聞は、『朝日新聞』・『毎日新聞』・『読売報知』⁽¹⁵⁾である(以下、『朝日』・『毎日』・『読売』と略記)。「朝日」・『毎日』は、東京版・大阪版の広告を扱う。これは、1944年4月に中央各紙の地方版が廃止され⁽¹⁶⁾、1943年と1945年の比較を行えるのが東京版と大阪版のみであることによる。

1. 『海鷲』の広告

1-1. 宣伝戦略

広告の宣伝文句に着目する時、まず検討すべきは映画を誰に観て貰いたいのか、すなわ

ちターゲットとなる層をどこに絞っているかである。

文言として多いのは、「全国少国民お待兼ねの長篇漫画映画」⁽¹⁷⁾、「お子様の話題を浚った大人気」⁽¹⁸⁾、「勇ましい全国少国民に大人気！」⁽¹⁹⁾、「お子様いつでも見られます」⁽²⁰⁾、「お父さんの御慰安に！お子さまの生きた教材に」⁽²¹⁾、「大人の見るマンガ」⁽²²⁾、「お家族揃ってぜひ御覧下さい」⁽²³⁾などのものである。ここから分かる様に、この映画の主たる観客層として想定されているのは子供である。同時に、子供だけではなく家族全員で揃って見に行ける映画だという事もアピールしている。「お父さんの御慰安に！お子さまの生きた教材に」という対比構造のキャッチコピーは頻出するが、単に娯楽としての要素だけではなく、教化宣伝としての要素も持ち合わせている作品だと強調する効果を有していると思われる。

以上から、『海鷲』が主たる対象とする観客層は子供であると同時に、それに付随する形で大人なども含めて家族全員を観客層として取り込もうとしている傾向が窺える。

1-2. 「真珠湾」と「鬼ヶ島」

『海鷲』の宣伝文句においては、真珠湾攻撃に関連した言葉が頻出する。具体的には、「真珠湾・米鬼艦隊大撃滅」⁽²⁴⁾、「真珠湾撃滅の大戦果 全国民必見の実戦映画」⁽²⁵⁾、「真珠湾一瞬にして全滅！」⁽²⁶⁾、「真珠湾撃滅の漫画化」⁽²⁷⁾、「あの日の感激を再現する漫画映画の巨篇！」⁽²⁸⁾といったものである。これらを見ると、真珠湾攻撃を取り入れた内容だと分かる。小林信彦は、『海鷲』より一年前に公開された『ハワイ・マレー沖海戦』⁽²⁹⁾について、「こんなストーリーでも観客がつめかけたのは、クライマックスに真珠湾とマレー沖の戦いがあるからである。(中略)明らかに作りもののスペクタクルと知りながら、人々がそれを楽しむ習慣はこの映画から始まった」⁽³⁰⁾、「ぼくは夢中になって観た。日本海軍が勝つ結末はわかっている、〈真珠湾攻撃がどういうものなのか〉をこの目で見たい好奇心がある」⁽³¹⁾、「観客もまた、そういう勇ましい気分で映画館を出た。

(中略)そして真珠湾と地上米軍の破壊の描写の残像を胸に、人々は元気になって家路についた」⁽³²⁾と述べている。フィクションだという前提を認識していながらも、華々しい戦果を上げた真珠湾攻撃に酔いしれていたという欲望がその背後にあったのだろう。

「真珠湾」という言葉を使用する事は、実際に行われた戦闘を想起させる効果を有する同時に、『ハワイ・マレー沖海戦』などの作品によって、既に人々の中に作られていた「真珠湾」に対する欲望を再び喚起させる効果も持っていた。但し、『ハワイ・マレー沖海戦』の

時とは戦況が違ふ点を考慮に入れる必要はある。1942年6月のミッドウェー海戦の敗北によって、戦局は悪化を辿り始める。すなわち、この時点では既に真珠湾攻撃の様な華々しい戦果は無い。この時期に内務省が作成した文書の、「緒戦ノ赫々タル戦果ニ依リ国民ノ一部ニハ早くモ戦争ノ前途ニ対スル安易感ヲ生ジ士気弛緩ノ色見エ、国防生産力ハ低下シ国民貯蓄亦鈍化スルノ兆示スト共ニ現実ニ迫リ来ル困苦欠乏感ニ対シ幾分焦慮ノ感アルヤヲ想ハシムルモノアリ」⁽³³⁾ という記述は、戦争に対する士気の低下の表れだろう。

「真珠湾」という言葉は、過去の輝かしい記憶を想起させると同時に、戦争へのイメージを好転させ、改めて戦意高揚を促す効果を持ったと言える。山本明は、「この時期、もう日本の敗色は濃くなっていたから、私は「今さらハワイ海戦か」と、シラけた気分でこの映画を見に行ったら、けっこう面白かった記憶がある」⁽³⁴⁾ と述べているが、これなどは上記の様な効果を如実に示した例だろう。そして、この効果を増幅させているのが「鬼ヶ島」という言葉である。広告内では、「真珠湾轟沈！鬼ヶ島空軍大撃滅」⁽³⁵⁾、「鬼ヶ島大爆撃 鬼ヶ島はハワイだ！」⁽³⁶⁾、「ハワイこそ！悪鬼米英の根拠地鬼ヶ島ではないか！」⁽³⁷⁾ という文言が見られる。ここでは「真珠湾＝鬼ヶ島」という図式が成立している。民話の桃太郎の筋書きが、日本軍が真珠湾にいる米艦隊を攻撃したという構図に当て嵌められている。真珠湾を鬼ヶ島に見立てて、より「真珠湾」という言葉の効果を高めようとしているといえよう。

この様に、「真珠湾」という言葉は、『海鷲』よりも以前に形作られていたであろう、真珠湾攻撃に対する華やかなイメージに則っている。同時に、「真珠湾＝鬼ヶ島」という図式が展開し、「真珠湾」という言葉の持つ戦勝イメージを増幅させている。真珠湾攻撃を題材とした内容の映画だと強調し、戦争に対しての高揚心が低下しかけていた民衆の意識に、戦争に対して良いイメージを持たせるという効果を持ったと思われる。

3. 『海の神兵』の広告

3-1. 宣伝戦略

『海の神兵』で特徴的なのは、「お家族」や「みんな」という言葉が『海鷲』に比べて強調されている点である。「大人も子供も喜ぶ長篇戦記漫画映画」⁽³⁸⁾、「楽しいお家族向きの傑作マンガ！」⁽³⁹⁾などのコピーが多用されている点からも、広い層が見られる映画だとアピールされていることが分かる。しかし、『海鷲』のキャッチコピーとの大きな相違点は、子供のみではなく、全ての観客層に向けて宣伝を行っている点である。

もう一つの特徴として挙げられるのは、教化的な宣伝文句が見られない点だろう。『アサヒグラフ』の広告は、「映画界驚異的、突如出撃の「海の神兵」が如何なる作戦で皆様の心膽を奪うか？全く文字通り鶴首待望の傑作です！」⁽⁴⁰⁾ というものであり、子供の為になるといった内容は書かれていない『海の神兵』では単純に娯楽という要素が強調されているのである。

更に注目すべきは、「昭和の英雄桃太郎さん！マンガに見る君達の姿」⁽⁴¹⁾ という文言である。先述した様に、『海鷲』においては桃太郎も含めて、作品に出てくるキャラクターはあくまで子供達に対して呼びかける存在であって、映画を観る側との同一化の要素は無かった。しかし、『海の神兵』での作品中のキャラクターは、観客との一体化がなされるべき存在として提示されている。

3-2. 作品の舞台

『海の神兵』の宣伝文句では特定の地名などは殆ど出てこない。「鬼ヶ島大狼狽 マンガ落下傘部隊突如敵陣地を奇襲！」⁽⁴²⁾、「南海に咲き開いたマンガ落下傘兵」⁽⁴³⁾、「鬼ヶ島よりまだ□いアメリカ兵をやっつけろ！」⁽⁴⁴⁾ などの宣伝文句を見ると、桃太郎の民話をモチーフとして鬼ヶ島を攻撃する内容だということは理解可能だが、「真珠湾＝鬼ヶ島」という明確な相関関係は成り立っていない。「南海」という語句を除いて、場所や日時を特定可能な語句が載っていないことが読み取れる。

4. 小括

本章では、『海鷲』と『海の神兵』の新聞広告について考察してきた。それによって得られた知見を述べる。

まず、対象として想定している観客層について。『海鷲』においては特に子供向けに特化した広告が打たれる場合が多い。これに対して、『海の神兵』では、全年齢層をターゲットにした内容の宣伝文句が多く見られる。戦時下において人々の生活に「下降的均質化」⁽⁴⁵⁾ がなされていった事は多くの所で指摘されているが、上記の様に、広告でも、より多くの層に対して呼びかけるという傾向が見られる。

次に、宣伝文句における教化的要素についてである。『海鷲』から『海の神兵』へという流れの中で、より娯楽を前面に押し出した構成に変化しているといえよう。太平洋戦争下の娯楽政策の特徴として「娯楽の戦時生活化」⁽⁴⁶⁾ に重点が置かれていたことが挙げら

れるが、実際には戦局の悪化と共に、娯楽的要素が押し出されている傾向が看取出来る。

桃太郎への同化という観点も『海鷲』と『海の神兵』の広告で異なる要素になっている。総力戦という考え方が、常に前線と銃後を意識させ、兵士と銃後の人間を接近させながらも、同化を許さないものである事⁽⁴⁷⁾を考える時、『海の神兵』の広告において、戦うキャラクターと観客の間に同一化を図ろうとするキャッチコピーが存在している事は注目すべきだろう。絵画の分野においても、戦時中において兵士への同化を求める事が表現者に求められる傾向があったが⁽⁴⁸⁾、アニメーションの作品の中でも同様の傾向が存在した可能性を指摘しておく。

また、作品の背景にある戦闘や作戦の特定性において差異が存在する。『海鷲』においては「真珠湾」という言葉が多用され、「真珠湾」と「鬼ヶ島」には等価関係が成立していた。これにより、桃太郎の鬼ヶ島征伐を軸とする民話と、当時の人々にとって栄光の記憶であったとも言えるべき真珠湾攻撃を重ね合わせる事が可能だったと思われる。対して、『海の神兵』では「南海」という言葉を除いては、実際の場所や時間を特定出来るような宣伝文句は無い。具体的な場所の提示が無いということは、広告、あるいは映画を観た人々が自由に想像出来る余地が残されている事を意味するだろう。

第三章 作品分析

1. 分析の視角とその方法

本章では、前章で分析した新聞広告で頻出したテーマについての、実際の作品における描写を考察する。新聞広告で「優勢な読み」として提示された内容が実際の作品の中ではどの様に描かれ、作品全体の中でどの様な役割を担っているのかを見ていく作業を行い、二本の作品が持つ共通点や変化などを析出する事が出来るだろう。

2. 『海鷲』の分析

2-1. 教化と娯楽

広告分析において、『海鷲』については子供を中心とした層に対して特に強く宣伝していると述べたが、実際の作品ではどの様になっているのだろうか。以下では、作品全体の特徴として挙げられる点を考察し、これらの特徴が広告の分析結果と合致しているのかどうかを見ていく。

まず、作品冒頭に出てくる字幕には、「この映画を大東亜戦争下の少国民に贈る」⁽⁴⁹⁾

と記されている。この字幕から、作品の観覧対象は子供であることが分かる。

次に、目立つ特徴としては作品全体において台詞が少ない点だろう。37分の作品だが、台詞があるのは作品冒頭の兵士（兎や猿、雉）の点呼、出撃前の桃太郎の訓示、飛行機の中から無線を打つ時、攻撃帰還後の桃太郎の点呼時のみである。台詞の量が極端に少ない分、キャラクターの動きや音楽などで補うという傾向が見られる。また、キャラクターの声は、鬼ヶ島の兵士を除いては、全て音域が高い。すなわち、子供の声である可能性が高い。鬼ヶ島の兵士については声の音域が低い事から、成人男性の声であろう。この事も、当該作品が子供を中心的にターゲットにしている証明となる。桃太郎や、実際に戦っている動物達を大人ではなく子供の声にする事で、作品を観る子供の側は、自分達と同じ様なキャラクターが戦っているという親近感を抱かせる効果を持つ。この点にからも、広告の分析と同様に、観客の主たる対象として子供が想定されていることが分かる。

又、この事は作品を考えていく上で非常に大きな影響を持つ。たとえ全体における台詞の量が少なかったとしても、キャラクターの殆どが子供の声で喋っているということは、作品中で行われている戦闘行為自体が、子供の遊びに近い感覚で捉えられ得る可能性を持つ事を意味する。すなわち、広告の謳い文句としては実際の戦闘を下敷きにしてあると言いながら、作品では、あたかもそれがお伽話の中の出来事であるかのように描かれているのである。これは、実際の戦争で行われる残虐行為などの実態が覆い隠されるという結果をもたらす。ジョージ・L・モッセは、「戦争の記憶もまた、平凡化の過程へと横領された。

（中略）戦争は矮小化された結果、畏怖させ怯えさせる存在ではなく、ありふれたものとなった。（中略）平凡化は、戦争を賞賛して栄光を称えるのではなく、選んで手元に置いておく程度に親しみやすくすることで、戦争を複製する手段であった。」⁽⁵⁰⁾と述べているが、これは『海鷲』についても当てはまる。あたかも子供の戦争ごっこであるかの様に攻撃の様子を描く事で、戦争に対する違和感や恐怖感といったものを取り除き、云わば戦争＝ゲームであるかの様な認識を観る側に与える効果を持つといえよう。

これは、教化という観点にもつながる。前章で、『海鷲』の広告では娯楽と教化の両方の要素が強調されていると述べた。しかし、今まで見てきたような作品の特徴を考える時、作品内において二つの要素は混合して、その効果を表出させている。実際に行われた戦闘を、あたかも子供のゲームであるかの様に描き、娯楽的要素を提供する。同時に、現実の戦争に対する積極的な参加を求めていくという、教化的要素をも満たしているのである。

「教化」という語句からは、具体的な言葉で戦争の意義が述べられているシーンを想像

しがちである。しかし、『海鷲』の中では戦争を意義付ける説明のシーンは無い。この作品の中で最もまとまった形の台詞があるのは、桃太郎の訓示のシーンであるが、その台詞は、

「これより空襲部隊をもって、鬼ヶ島にかかる。攻撃の目標は鬼ヶ島艦隊(聞き取り不能)、並びに赤鬼空軍の撃滅である。月月火水木金金の日頃の猛烈な訓練はこの時の為であった。艦長はお前達の帰りをいつまでも待っているぞ。断じて鬼ヶ島を撃滅せよ。」というものと、

「本日の鬼ヶ島攻撃は大勝利をおさめ、敵の全艦隊を撃滅した。お前達の勇敢なる働きを艦長は嬉しく思う。なお、本攻撃において我が方の損害は雷撃隊第三号機一機であるが、乗員は奇跡的に助かり、目下本艦に帰りつつある事が分かった。以上。」という内容である。この中では攻撃の意義について説明されていない。言葉で戦争の意義を説明するのではなく、あくまで寓話の中の戦争であるかのように見せていながら、現実の戦争遂行への同意を求める構造になっていることが分かるだろう。

この様に見て来ると、先程も述べた様に『海鷲』においては娯楽と教化という要素が一体となっている。すなわち、娯楽としての要素があって当時の人々が「楽しい」と思える場面にこそ、教化としての要素も同時に入っていたと言える。

2-2. 「真珠湾」と「鬼ヶ島」の関係

前章において、『海鷲』の広告のキャッチコピーにおける「真珠湾＝鬼ヶ島」という相関関係の成立を明らかにした。実際の作品中では、前項の桃太郎の訓示の台詞からも分かる通り、「鬼ヶ島」という単語は出てくるものの、「真珠湾」という単語は出てこない。しかし、これは「真珠湾」を連想させる様な要素が全く出てこないことを意味しない。飛行機で敵の艦隊を攻撃して沈める、という攻撃方法は、この作品だけではなく、当時の他の媒体においても見られる。これらのイメージは、真珠湾攻撃の直後から頻出してくるようになる。『写真週報』の巻末には毎回、「大東亜戦争漫画日誌」というコーナー⁽⁵¹⁾や、他にも投稿によるイラストが掲載されているのだが、「米英の主力艦もあつさりと撃滅」⁽⁵²⁾といったキャプションと共に、翼に日の丸が描かれた飛行機によって艦隊⁽⁵³⁾が沈められているイラストや、「海底の屑鉄」⁽⁵⁴⁾と題したイラストでは、「爆撃のわが勇士『ソーラ、また屑鉄の増産だ!』」というキャプションで、日の丸をあしらった飛行機が戦艦を沈めており、海底では沈められた戦艦が山積しているというカットが載っている。あるいは、「お魚にも特配」⁽⁵⁵⁾というイラストでは、「五月は内地に嬉しいお砂糖の特配だが、大東亜の魚族諸君にもご相伴ができました」という解説と共に、日の丸の飛行機によってイ

ギリス国旗の船舶が撃沈されて積荷（砂糖）の袋が海底に沈んで破け、それに魚が喜んで群がってくるという内容のイラストが掲載されている。

また、このイラストが掲載されていたのと同じ時期に『アサヒグラフ』には、「大東亜戦争第一次戦捷見取図」⁽⁵⁶⁾と題して、日本軍の戦果を宣伝するイラストが掲載されているが、ハワイの所では艦隊が逆さになって沈んでいる絵と共に、「マツタク醜体（ママ）ノカギリデスナ」、「コレガホントノ心中湾サ」という吹き出しがある。「心中湾」は「真珠湾」をもじったものだろうが、戦艦が沈んでいる絵は、このイラスト全体の中でハワイの部分のみである。また、『写真週報』でも、同様のコンセプトの「忙しかつたこの半年 大東亜戦争海軍の巻」⁽⁵⁷⁾という見開きのイラストが掲載されている。そのイラストで「ハワイ海戦」と題された部分では、アメリカ国旗を掲げた戦艦が日の丸の飛行機に爆弾を落とされて撃沈されるという場面が描かれている。このイラストで、日本軍の飛行機がアメリカ合衆国の戦艦を沈めるという構図になっているのはハワイの部分だけである。この様に、当時の雑誌メディアでは、飛行機で戦艦を沈めるというイメージが、真珠湾という固有の場所を想起させるものとして使用されている。

広告という、言葉が重視されるメディアでは、真珠湾攻撃と桃太郎の物語を関係させる言説を頻出させる。対して実際の作品ではそれを表に出さず、あくまで桃太郎の物語の枠の範疇に収めようとしながら、ストーリー展開や描き方などの部分で真珠湾と鬼ヶ島の間を結びつける。この様に相反する表現の仕方をする事で、より娯楽としての要素を高めると同時に、「真珠湾攻撃の物語」だと効果的に伝達する効果を有しているとも考えられる。

3. 『海の神兵』の分析

3-1. 教化と娯楽

『海の神兵』の広告では「お家族」や「みんな」といった、全体や集団を表す宣伝文句が頻出してくることが特徴であった。『海鷲』においては、作品自体も子供向けだと思われる要素（キャラクターの声が殆ど子供のもの。或いは台詞が非常に少ない点と音楽が多いという点から、内容を理解しやすいという意味でミュージカル的な要素を持つ事など）を持っていたが、『海の神兵』においてこの要素が織り込まれているのかどうかを考えていく。

まず、キャラクターの声だが、多くのキャラクターの声の音域が高いことに加えて、味方の側の声は子供の声で、攻撃される側の敵方のキャラクターの声は成人男性の声であるという傾向は『海鷲』と共通する。但し、相違点も存在する。物語終盤、桃太郎達が鬼ヶ

島に攻撃を行う直前に、影絵のシーケンス⁽⁵⁸⁾が挿入されるのだが、このシーケンスだけではずっと同一の人間が語る形を取っており、尚且つこの人物の声の音域が低い（このシーケンスの内容は後述）。『海鷲』では敵と味方という二分法で、明確に分けられていたものが、『海の神兵』では第三者の立場が入ってきている。作品全体としては、ほぼ全編に亘ってキャラクターの声が子供である事から、『海鷲』と同様に『海の神兵』も、一見すると子供の戦争ごっこ、という様な要素を持ち合わせている。しかし、上記の様な部分が挿入されているという事は、子供以外に関してもターゲットとする意図を感じさせる。

そして、音楽の使用方法だが、『海の神兵』は『海鷲』と基本的な所では同じ傾向を有している。味方が映される場面などではオーケストラの演奏⁽⁵⁹⁾による物と思われる音楽や合唱が流れるものの、攻撃するシーンや飛行機が出てくるシーンにおいては音楽が使われない。また、敵が出てくるシーンや戦闘シーンでは効果音のみを流すという傾向も『海鷲』と同様である。

しかし、台詞という点では、二つの作品は全く異なる。『海の神兵』においては二つの場面で、明確に戦争の意義や攻撃に対するスタンスが語られるのである。

一つ目は、前述の影絵のシーケンスである。ここでは、南の島（ゴア）の王の所に商人がやってきて、貿易をしたいのでその拠点となる「一銭銅貨」程の土地を貸して欲しいと願い出て、王に許可される。しかし、「一銭銅貨」は、地図上での一銭銅貨分の土地であり、それはゴアの島全てだと明かされる⁽⁶⁰⁾。王は抗議をするものの、「これが、我が国のしきたりです」という言葉と共に、島への攻撃が始まり、「ゴアの王様は、最後までよく戦った。しかし、遂には敗れ、この美しい島も海賊の手に掠め取られた。千古斧鉞を入れざるジャングルに古き石像あり。刻みて曰く、月明あかるき夜、東方天子の国より白馬にまたがりたる神の兵来たりて、必ずや民族を解放せん。」⁽⁶¹⁾という声が入り、再び出撃準備をしている桃太郎の部隊の場面に戻る。

このストーリー展開は、欧米列強によって東南アジアの島々が植民地化される過程を描き出している。また、「東方天子の国」すなわち大日本帝国から東南アジアを解放する兵隊が来るのだ、という「大東亜共栄圏」の考え方が明確に表されている。伊藤暢直は「主人公である桃太郎や本編に登場する動物たちに語らせず、ストーリーに関係なく主題を展開させることで、より効果的に伝わるような構成になっている。」⁽⁶²⁾と指摘しているが、正しいだろう。先ほど、この場面は大人の声であり音域が低いと述べたが、その事によって台詞が荘厳な雰囲気になる。この事で、作品中の物語とは全く別の次元から語られてい

るという効果を生み出し、あたかも真実であるかの様な響きを出している。

二つ目は、出撃前の桃太郎の訓示である。その台詞は、「いよいよ、我々の待ちに待った作戦は、明朝を期して火蓋を切る事になった。皆、もう既に覚悟は出来ている事と思う。我が海軍落下傘部隊の長い間、秘密の内に黙々と鍛えた訓練の成果を、初めて表す時が来た。お前達はこの長い間、両親や兄弟にも訓練の事は語る事も出来ず、苦しい事であったと思う。明日こそ我々は、最後の一兵となるまで敵陣に突撃するのだ。皆、覚悟は出来ているか。(兵隊達の呼応する声) ようし、今夜は我々の最後の夜となった。攻撃隊出発は四時。以上。」というものである。

『海鷲』の訓示では「艦長はお前達の帰りをいつまでも待っているぞ。断じて鬼ヶ島を撃滅せよ。」という様に、攻撃隊の生還を前提として訓示がなされている。対して『海の神兵』の訓示は、生還を前提としていない。『海の神兵』が製作されたのは公開前年の1944年であり、この年の7～9月には、マリアナ諸島の失陥とマリアナ沖海戦の敗北によって絶対国防圏が崩壊し、戦局は絶望的になる⁽⁶³⁾と共に、特攻隊の様に生還を前提としない作戦が行われるようになった。この様に見て来ると、『海の神兵』という作品は、当時の絶望的な時代状況を踏まえた上で、尚且つ、それをも包摂する様な形で戦争の目的が語られ、死に対する称揚が行われている。

『海鷲』では戦争の意義が言葉で語られなかったものの、『海の神兵』ではストーリー展開と台詞の中で語られるという相違が見られる。『海の神兵』の新聞広告では、『海鷲』にあったような娯楽と教化を併せ持つのではなく、専ら娯楽としての側面が強調されていた。しかし、実際の作品では娯楽と同時に、台詞などで教化的要素が前面に押し出されている。

3-2. 作品の舞台

『海鷲』の広告では、「真珠湾」という言葉が頻出し、物語の舞台となっている場所についての特定が可能であった。作品自体の分析でも分かった様に、「真珠湾＝鬼ヶ島」という図式が成立すると共に、飛行機で攻撃して戦艦を沈めるというイメージ自体が真珠湾に特有のものであり、ストーリー展開そのものを規定する要素であった。

対して『海の神兵』の新聞広告においては具体的な場所の特定はできない。「南方」という言葉も、具体的に南方のどこを指すのかは明記されていない。実際の作品内でも、冒頭で、「メナド降下作戦に／参加せる／海軍落下傘部隊／兵士の談話による」⁽⁶⁴⁾という字幕があるものの、全編が一つの作戦をなぞった内容にはなっていない。

物語終盤の会見の場面を見てみよう。鬼ヶ島に落下傘で降下し兵隊達を降参に追い込んだ後、桃太郎は相手方の将校と会談する。桃太郎は非常に高圧的な態度で相手方の司令官に全面降伏を求める。この場面はシンガポール陥落の時の象徴的な場面である。この時の日本側の山下奉文とイギリス側のアーサー・パーシバルとの会見において、山下がパーシバルに降伏を迫るイメージが、戦時下の映画においては多用された⁽⁶⁵⁾。『写真週報』の「昭南生れて一年 破壊から建設へ」⁽⁶⁶⁾という記事では、「わが山下軍司令官と英敗将パーシバルが歴史的な会見を遂げたフォード会社の一室は、伸びゆく昭南島の礎をそのままに示すやうに、日英両軍司令官会見記念室として保存されてゐる」⁽⁶⁷⁾というキャプションと共に、夫々の席を示す板が置かれた会見場の写真が載せられている。また、この会見は報道写真などだけではなく、宮本三郎の作品のモチーフともなり⁽⁶⁸⁾、様々なメディアを越境する共通のイメージとして流布したことが分かる。敵国に対する勝利という優越感に浸れる材料として山下・パーシバルの会見が扱われたといえよう。

他にも、作品冒頭の動物達が村へと帰郷するシーンや、後半の南方のシーンなどでも具体的な場所が特定できる要素は画面から排除されている。ただし、この「二つの場面」にはその展開に共通性が存在する。

まず、「歓迎される日本兵」という点が共通する。帰郷のシーンで兵隊達は村人達に歓迎され、南の島のシーンで桃太郎の部隊は原住民に歓迎される（基地の建設を手伝う）。同時に、双方の場面で兵士達は英雄の様な位置付けになっている点が指摘できる。郷里では、遺家族の訪問や義捐金の提出などの作法が形作られ、出征者は郷里の英雄として認知された⁽⁶⁹⁾。南の島では、影絵のシークエンスによって、日本軍が民族を解放する存在だと説明される。これは同時に啓蒙という観点にも繋がる。帰郷のシーンでは、猿が村の子供達に飛行機に乗っている時の話をして村の子供達に対して「航空隊に入隊して一番嬉しい事は、初めて飛行機に乗れた時、すなわち単独飛行を許された時だな。自分で操縦して大空を我が物顔に飛び回るんだ。はるか目の下には、山や川がちょうど箱庭の様に流れる。どんなものでもどンドン追い越していく。凄い速度で。(中略)とにかく、お前達にも乗せてあげたいよ。愉快だよ。」と話し、南の島では兵隊達が原住民に日本語を教え、啓蒙する。

これを見ると、飛行機の「愉快」な話をする事で、その先にある戦闘という側面を覆い隠し、自分達の行為の正当性を築こうという意図と同時に、その話を聞いている村の子供達に対しても、攻撃の正当性や勇壮な側面を伝えていることが分かる。又、当時、日本固有の精神を会得させる為の儀礼として日本語が教えられるべきという認識があった⁽⁷⁰⁾事

を考えれば、日本語を教えるという行為自体が、日本軍の行為の正当性を強調する為に行われているものと言える。兵士達が自分よりも下の立場の人間に啓蒙するという構図が共通し、それによって兵士達が行っている事の正当性が担保されるという図式である。

そして、桃太郎の部隊の兵隊達には夫々の郷里が存在する。どこの郷里と明示されていない以上、それはどの兵士の郷里でも起こり得る光景である事を示唆する。各人の郷里で飛行機という存在を介した啓蒙が行われ、夫々の郷里から出てきた兵士の集合体である日本軍が、今度は南の島で原住民に対して日本語を啓蒙する。ここから、故郷と南の島という二つの場所の相似という関係性が立ち現れる。特定が出来ないという事の下に無限に拡大し得る正当性を担保した先にあるのが、敵国に対する飛行機と落下傘での攻撃なのだ。

以上のことから、『海の神兵』においては特定の作戦や事実がなぞられる形で物語が作られる訳ではなく、様々な勝利の物語が寄せ集められて結合されている事が分かる。しかし、それは『海鷲』の様に場所や時間を特定して成立する共通認識の強さに劣る事は無く、むしろ自由に解釈出来るという特徴によって、強固な形で物語の説得力を強めている。

4. 小括

本章では、前章における新聞広告の考察において頻出あるいは強調されていたテーマを、作品の「優勢な読み」を誘導するものと考え、それに沿って作品自体の表現や、作品中の表現を当時の他のメディアと比較して、その表現や描写、設定が如何なる意味を持つのかについて分析した。以下、ここまでの考察で明らかになった事を記す。

まず、作品全体を貫く特徴について。『海鷲』においては、冒頭の字幕などから子供を主たる観客層としている事が分かる。又、キャラクターの声などから、実際の戦争をモチーフにしたものであるとしながらも、子供の戦争ごっこといった様な雰囲気を漂わせているという傾向が看取できる。この事は作品を考える上で非常に重要である。戦争をあたかも愛でる事が出来るような存在へと「平凡化」を行う事で、戦闘の残虐さなどの実態を覆い隠す効果を持つ。これは『海の神兵』においても同様である。又、『海鷲』においては単に鬼ヶ島に攻撃を行うだけであるが、『海の神兵』においては攻撃の場面だけではなく、戦う意義が言葉によって語られるという特徴がある。

次に、作品の舞台設定について。『海鷲』においては真珠湾攻撃という形で場所と時間が明確に特定されているのに対し、『海の神兵』においては、メナド降下作戦という元の話があるものの、実際には様々な「勝利の記憶」とも言うべき場面が寄せ集められて構成され

ている作品である事が分かる。又、『海鷲』では「真珠湾＝鬼ヶ島」であるといったような事を明確に示す言葉はない。しかし、飛行機で攻撃して戦艦を沈没させるという攻撃方法自体が真珠湾に特有のイメージであり、敢えて言葉で説明せずに作品内の描写だけに留める手法を採用して、より物語の説得力を高めていると言える。これに対して、『海の神兵』では場所と時間が特定されない、故郷と南の島という二つの場所が相似の関係で現れる。この中で、それぞれの場所で啓蒙的な活動（飛行機の話や日本語教育）が行われる事により、攻撃を行う側の正当性が担保される。すなわち、『海鷲』においては場所や時間を特定して、物語の説得力を高めている。これに対して、『海の神兵』では場所や時間を特定する要素を敢えて排除し、より普遍性を高めて、観客の広い層が自由に想像出来る余地を残す事で説得力を持たせている。

このように、『海鷲』は言葉ではなく描写に重きを置いてその正当性を強調しようとするのに対して、『海の神兵』は言葉によってその正当性を強調するという傾向が見られる。広告では教化と娯楽の側面はあたかも区別されている様な傾向が見られたが、実際の作品においてはこれらの要素は厳然と区別出来るものではなく、むしろ娯楽としての要素が強い場面にこそ、教化としての要素も同時に織り込まれていると考えられる。

終章 結論

桃太郎を主役に据えた戦時下の日本のアニメーションは、戦争開始直後の時期においては真珠湾攻撃などの特定の戦闘や作戦の華々しい勝利をモチーフにして作られた。これは緒戦の勝利によって、作品を見るであろう人々の中に、「あの場面をフィクションでもいいから見てみたい」という共通認識が形成されていた事を意味する。アニメーション作品だけでなく、『写真週報』や『アサヒグラフ』などの雑誌においても、この様な勝利の記憶というものは同時に形成されており、人々の共通した認識を作り上げる役割を果たした。

『海鷲』では、真珠湾攻撃を基にした旨が広告において明記されており、作品中でも真珠湾攻撃を想起させる描写が多数見られる。これらから、国民の共通認識となっていた過去の華々しい記憶を呼び覚まし、更なる戦争遂行への期待を高めたと言える。

しかし、これらの集合的な記憶は戦局の悪化と共に、その効力を失う。そこで、物語の説得力を高めていく為に、一つの勝利に関する共通の記憶だけではなく、各人が自分の経験や出自の範囲で自由に解釈可能な、幅のある内容を盛り込む必要に迫られた。誰もが共感出来る単一のイメージに内容を収斂させるのではなく、誰もが自分の状況を当て嵌めて

共感出来る内容にする為に、表現を拡散させるという方向転換が行われたのである。『海の神兵』においては、メナド降下作戦を基にしている旨が作品に書かれている。しかし、実際には単一の戦果だけではなく、落下傘部隊の降下や、山下・パーシバルの会見などの、過去に報道された様々な戦果のイメージを流用して合成されている。又、兵営での日常生活や、故郷における場面が相似化された形で描かれ、観客は映画の内容を自分のいる地点へと無理なく結びつけられる場面も存在する。『海の神兵』においては、国民にとって都合の良い記憶だけを取り出して紡ぎ合わせ、戦争遂行への支持を調達しようとしたと言える。

以上のことから、表象はその時の社会状況にとって最も都合の良い記憶を形成し得る要素を重ね合わせて成り立つ事が分かる。戦争遂行に都合の悪い記憶は意図的に忘却され、都合の良い記憶のみが再生産されるというメカニズムである。都合の良い記憶だけを思い出して戦争の意義を見出したい国民と、都合の良い記憶だけを提示して戦争を遂行したい国家の思惑が交差する地点で、表象におけるテーマや描写が規定されるのである。

このことは、戦時下における人々の戦争に対する意識を論じる際にも重要である。『海鷲』と『海の神兵』を比較検討して見えてきたのは、戦争末期にかけて人々の戦意が低下するという単線的な理解ではない。確かに、戦局の悪化に伴って流言が飛び交い、戦意の低下と不安の増大が見られた事は、多くの先行研究によって明らかにされている。しかし、実際に見えてくるのは、その様な中でも戦争を続けるに値する「正当」理由を見つけ出そうとし、それが作品に反映されると共に、完成した後は、作品で提示された「正当」な理由が自分達の意識を規定していく、という相互依存の関係である。

また、本稿では教化的要素と娯楽的要素についても考察したが、これはプロパガンダについて考える時にも重要である。古川隆久は、映画作品に対して教化としての要素と娯楽としての要素を分割し、庶民は専ら娯楽の要素が強い映画を観に行き、教化の要素の強い国策映画は観なかったと結論付けている⁽⁷¹⁾。しかし、教化と娯楽という要素を線で区切る様に分けて考えるのは不可能だと言わざるを得ない。娯楽的要素のある場面にこそ、教化的要素が強く込められているのである。両者が融合して「楽しい内容の教化」になっている所がプロパガンダの最大の特徴であり、問題点なのではないだろうか。

最後に、本稿では扱えなかったが、両作品では飛行機と落下傘部隊という二つの攻撃手段が、雑誌メディアなどと同様に強調されている。詳細な分析は他日を期したい。

-
- ¹ 当該時期の戦争の呼称について様々な議論があるものの、本稿では、最も実態に近いと思われるこの呼称を使用する。成田龍一・吉田裕「まえがき」(倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争1』岩波書店、2005年、vii～x iii頁)など。
- ² 一ノ瀬俊也『近代日本の徴兵制と社会』(吉川弘文館、2004年)331頁。
- ³ ルイ・アルチュセール著、柳井隆訳「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」(ルイ・アルチュセール、柳井隆、山本哲士『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社、1993年、7～111頁)。
- ⁴ 森武磨「総力戦・ファシズム・戦後改革」(倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争1』岩波書店、2005年、125～160頁)。
- ⁵ 磯前順一『喪失とノスタルジア』(みすず書房、2007年)35頁。
- ⁶ 野上元『戦争体験の社会学』(弘文堂、2006年)48頁。
- ⁷ 主たる先行研究としては、秋田孝宏「漫画映画の笑いと英雄」(岩本憲児編『日本映画史叢書2』森話社、2004年、255～267頁)、伊藤暢直「映画に描かれた前線と銃後」(山室建徳編『日本の時代史25』吉川弘文館、2004年、140～179頁)、川村湊「「鬼畜米英」論」(倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争6』岩波書店、2006年、297～324頁)、ジョン・W・ダワー著、猿谷要監修、斎藤元一訳『容赦なき戦争』(平凡社、2001年)、鳥越信『桃太郎の運命』(ミネルヴァ書房、2004年)、ピーター・B・ハーイ『帝国の銀幕』(名古屋大学出版会、1995年)がある。
- ⁸ 古川隆久『戦時下の日本映画』(吉川弘文館、2003年)や川村湊、前掲論文など。
- ⁹ ジェームス・プロクター著、小笠原博毅訳『スチュアート・ホール』(青土社、2006年)112～115頁。
- ¹⁰ 山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、1981年)。
- ¹¹ 吉見俊哉『カルチュラル・スタディーズ』(岩波書店、2000年)70頁。
- ¹² 滝田賢治「「国民国家」アメリカにおけるベトナム戦争の公的記憶」(細谷千博・入江昭・大芝亮編『記憶としてのパールハーバー』ミネルヴァ書房、2004年、316～333頁)325頁。
- ¹³ 佐藤卓己『現代メディア史』(岩波書店、1998年)91頁。
- ¹⁴ この点は、玉井清編『戦時日本の国民意識』(慶應義塾大学出版会、2008年)を参照。
- ¹⁵ 『読売新聞』は1942年8月に『報知新聞』を合併し、『読売報知』に改題される。山本武利、前掲書、1981年、431頁。
- ¹⁶ 同前、432頁。
- ¹⁷ 『毎日』(東京)1943年3月16日など。
- ¹⁸ 『朝日』(東京)1943年3月24日など。
- ¹⁹ 『朝日』(東京)1943年3月27日。
- ²⁰ 『朝日』(大阪)1943年3月13日。
- ²¹ 『朝日』(東京)1943年3月16日など。
- ²² 『毎日』(大阪)1943年3月23日、『朝日』(大阪)同年3月24日。
- ²³ 『朝日』(大阪)1943年3月25日など。
- ²⁴ 『朝日』(東京)1943年3月9日。図1。
- ²⁵ 『読売』1943年3月25日。
- ²⁶ 『朝日』(東京)1943年3月17日。
- ²⁷ 『毎日』・『朝日』(夫々東京)1943年3月14日。
- ²⁸ 『アサヒグラフ』1943年3月31日。
- ²⁹ 1942年12月公開。製作は東宝、特技監督は円谷英二。
- ³⁰ 小林信彦『一少年の観た〈聖戦〉』(筑摩書房、1998年)62頁。
- ³¹ 同前。
- ³² 同前、64頁。
- ³³ 情報局「大東亜戦争の現段階に即応する輿論指導方針(1942年11月27日)」(赤澤史

-
- 朗ほか編『資料日本現代史 13』大月書店、1985年、197～198頁) 197頁。
- ³⁴ 山本明「十五年戦争下、日本の戦争映画」(『講座日本映画 4』岩波書店、1986年、68～83頁) 79頁。
- ³⁵ 『朝日』(東京) 1943年3月12日。
- ³⁶ 『毎日』(大阪) 1943年3月16日。図2。
- ³⁷ 『アサヒグラフ』1943年3月31日。
- ³⁸ 『毎日』(大阪) 1945年4月26日など。
- ³⁹ 『朝日』(東京) 1945年4月15日など。
- ⁴⁰ 『アサヒグラフ』1944年12月20日。
- ⁴¹ 『毎日』(大阪) 1945年4月19日。図4。
- ⁴² 『毎日』(東京) 1945年1月28日。
- ⁴³ 同前、同年3月10日。『読売』同年3月7日、『朝日』(東京) 同年1月30日・3月9日。図3。
- ⁴⁴ 『朝日』(大阪) 1945年4月12日。図5。
- ⁴⁵ 雨宮昭一『戦時戦後体制論』(岩波書店、1997年) 15頁。
- ⁴⁶ 赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』(校倉書房、1985年) 313頁。
- ⁴⁷ 河田明久「戦う兵士／護る兵士」(倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争 3』岩波書店、2006年、31～60頁) 31頁。
- ⁴⁸ 同前、40～43頁。
- ⁴⁹ 図6。
- ⁵⁰ ジョージ・L・モッセ著、宮武実知子訳『英霊』(柏書房、2002年) 133～134頁。
- ⁵¹ このコーナーでは、戦況を一コマのイラスト形式にして複数のコマを載せている。
- ⁵² 『写真週報』1942年1月28日(第205号) 23頁。図9。
- ⁵³ 判別するのは難しいが、恐らくイギリスかアメリカ合衆国の国旗だと思われる。
- ⁵⁴ 『写真週報』1942年3月11日(第211号) 23頁。図10。
- ⁵⁵ 同前、1942年5月13日(第220号) 23頁。図7。
- ⁵⁶ 『アサヒグラフ』1942年2月25日。図13。
- ⁵⁷ 『写真週報』1942年5月20日(第221号) 22～23頁。図14。
- ⁵⁸ 図14。
- ⁵⁹ 冒頭部分のスタッフロールには、「演奏 大東亜交響楽団／松竹軽音楽団／合唱 ニック合唱団」という文字が確認できる。
- ⁶⁰ 図8。
- ⁶¹ 台詞の一部について、伊藤暢直、前掲書、177頁を参考にした。
- ⁶² 同上。
- ⁶³ 江口圭一『十五年戦争小史 新版』(青木書店、1991年) 228頁。
- ⁶⁴ メナドはインドネシアのセレベス島の北端に位置する。
- ⁶⁵ ピーター・B・ハーイ、前掲書、1995年、332頁。
- ⁶⁶ 『写真週報』1943年2月10日(第258号) 4～5頁。
- ⁶⁷ 同前4頁。図12。
- ⁶⁸ この作品については、水沢勉責任編集『日本の近代美術 10』(大月書店、1992年)を参照。また、戦争画の問題を網羅的に扱ったものに丹尾安典・河田明久『イメージの中の戦争』(岩波書店、1996年)、針生一郎ほか編『戦争と美術 1937-1945』(国書刊行会、2007年)がある。
- ⁶⁹ 成田龍一『「故郷」という物語』(吉川弘文館、1998年) 132～133頁。
- ⁷⁰ 安田敏朗『「国語」の近代史』(中央公論新社、2006年) 150頁。
- ⁷¹ 古川隆久、前掲書。

◎参考文献・論文（編著者五十音順）

- ・赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』校倉書房、1985年
- ・赤澤史朗ほか編『資料日本現代史 13』大月書店、1985年
- ・秋田孝宏「漫画映画の笑いと英雄」
(岩本憲児編『日本映画史叢書 2』森話社、2004年、255～267頁)
- ・雨宮昭一『戦時戦後体制論』岩波書店、1997年
- ・磯前順一『喪失とノスタルジア』みすず書房、2007年
- ・一ノ瀬俊也『近代日本の徴兵制と社会』吉川弘文館、2004年
- ・伊藤暢直「映画に描かれた前線と銃後」
(山室建徳編『日本の時代史 25』吉川弘文館、2004年、140～179頁)
- ・江口圭一『十五年戦争小史 新版』青木書店、1991年
- ・河田明久「戦う兵士／護る兵士」
(倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争 3』岩波書店、2006年、31～60頁所収)
- ・川村湊「「鬼畜米英」論」
(倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争 6』岩波書店、2006年、297～324頁)
- ・小林信彦『一少年の見た〈聖戦〉』筑摩書房、1998年
- ・佐藤卓己『現代メディア史』岩波書店、1998年
- ・ジェームス・プロクター著、小笠原博毅訳『スチュアート・ホール』青土社、2006年
- ・ジョージ・L・モッセ著、宮武実知子訳『英霊』柏書房、2002年
- ・ジョン・W・ダワー著、猿谷要監修、斎藤元一訳『容赦なき戦争』平凡社、2001年
- ・滝田賢治「「国民国家」アメリカにおけるベトナム戦争の公的記憶」(細谷千博ほか編『記憶としてのパールハーバー』ミネルヴァ書房、2004年、316～333頁)
- ・田中純一郎『日本教育映画発達史』蝸牛社、1979年
- ・玉井清編『戦時日本の国民意識』慶應義塾大学出版会、2008年
- ・丹尾安典・河田明久『イメージの中の戦争』岩波書店、1996年
- ・登川直樹ほか『講座アニメーション 2 世界の作家たち』美術出版社、1987年
- ・戸ノ下達也「電波に乗った歌声」
(赤澤史朗ほか編『年報日本現代史 7』現代史料出版、2001年、115～145頁)
- ・鳥越信『桃太郎の運命』ミネルヴァ書房、2004年
- ・成田龍一『「故郷」という物語』吉川弘文館、1998年

- ・成田龍一・吉田裕「まえがき」
(倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争1』岩波書店、2005年、～頁)
- ・野上元『戦争体験の社会学』弘文堂、2006年
- ・針生一郎ほか編『戦争と美術 1937-1945』国書刊行会、2007年
- ・ピーター・B・ハーイ『帝国の銀幕』名古屋大学出版会、1995年
- ・古川隆久『戦時下の日本映画』吉川弘文館、2003年
- ・水沢勉責任編集『日本の近代美術10』大月書店、1992年
- ・森武麿「総力戦・ファシズム・戦後改革」
(倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争1』岩波書店、2005年、125～160頁)
- ・安田敏朗『「国語」の近代史』中央公論新社、2006年
- ・山本明「十五年戦争下、日本の戦争映画」
(『講座日本映画4』岩波書店、1986年、68～83頁)
- ・山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、1981年
- ・吉見俊哉『カルチュラル・スタディーズ』岩波書店、2000年
- ・ルイ・アルチュセール著、柳井隆訳「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」
(ルイ・アルチュセール、柳井隆、山本哲士『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』
三交社、1993年、7～111頁)

◎参考資料

- ・『アサヒグラフ』朝日新聞社
- ・『朝日新聞』(東京版、大阪版)朝日新聞社
- ・『写真週報』内閣情報局、1938～1945年
- ・『毎日新聞』(東京版、大阪版)毎日新聞社
- ・『読売報知』読売新聞社

〈付記〉

本稿は、拙稿「太平洋戦争下の日本のアニメーションにおける戦争イメージ」(千葉大学文学部2006年度卒業論文)に加筆・訂正したものである。粘り強く指導をして下さった、指導教員の池田忍准教授、丁寧な助言を下された東京国立近代美術館の大谷省吾主任研究員、執筆時に多大なご協力を頂いた、千葉慶氏、木村智哉氏に深く感謝したい。

◎両作品ストーリー

・『桃太郎の海鷲』

飛行機が影絵の様に映し出され、動物達（これも影絵）が整備をしている。次第に明るくなり、船の上だという事が分かる。ラッパの音と共に、甲板上の動物達一箇所に集合し、点呼を取る。そこへ桃太郎が出てきて、出撃に当たっての訓辞を行う。その後、動物が飛行機に乗って鬼ヶ島に出撃する。その道中、ある飛行機に鳥の雛が迷い込むが、猿が日本軍の飛行機の玩具を取り出すと喜ぶ。親鳥が近くに来たので猿が親鳥の所に雛を連れて行き、鳥の親子は無事に再会する。

鬼ヶ島が近づくと、母艦から無線で攻撃にとの指令が入り、攻撃の準備がなされる。鬼ヶ島に停泊している戦艦の様子などが映し出され、桃太郎の軍勢は攻撃に入る。突然の攻撃に驚いた鬼ヶ島の兵隊は逃げ惑い、戦艦から退却するが、結局は海に落ちる。鬼ヶ島側のボスらしき兵隊（角を生やしている）も同様に逃げ惑う。又、桃太郎のいる母艦には、奇襲に成功した旨の報告が入り、残っていた兎達は喜ぶ。

再び場面は鬼ヶ島になる。魚雷で戦艦が次々と沈められていく。先程の猿が乗っていた飛行機も魚雷を投下するが、別の方向に行ってしまう。猿は飛行機から飛び出し、自ら魚雷に追いついて軌道修正を行って、敵方の戦艦を沈める。猿は飛行機に帰還して他の隊員と喜び合う。次に、別の飛行機から猿が何匹も地上に落下して、地上に置いてある敵方の飛行機を炎上させ、連鎖反応で他の飛行機も破壊する。

敵方が残った戦艦から反撃を始める。先程の猿の乗っている飛行機が被弾する。鬼ヶ島に場面は戻り、先述の敵方のボスが戦艦から白旗を上げるが、間に合わずに攻撃され、自身も海に沈む。破壊された戦艦の残骸や炎上する戦艦が映し出される。

場面は桃太郎のいる母艦に戻り、攻撃を終えた飛行機が次々に帰還してくる。兎達が歓声と共に迎え、飛行機から降りてきた兵隊達と共に祝い合う。被弾した一機だけが帰ってこないものの、出撃の際に助けた鳥の親子に助けられて乗員は母艦へと向かう。再び桃太郎の訓示があり、そこで被弾した飛行機の乗員が無事に帰還する予定だと伝えられる。兎達は喜び、母艦は遠ざかっていく。

・『桃太郎 海の神兵』

雉や猿、犬、熊などが故郷に帰還する所から始まる。そして、村人（全員何らかの動物である。この映画で人間として出てくるのは桃太郎のみ）達は総出で彼らを歓迎し、帰還した動物達は神社へと参拝する。村の住人にせがまれて猿が海軍の事について車座になって話す。内容は艦船の事などではなく、航空隊の事であり、ここで猿は飛行兵であった事が分かる。話の途中で猿の被っていた海軍の制帽を子猿が持ち出し、被りながら川辺を歩いていると制帽が川に落ちてしまう。その事が村中に知らされて動物達が駆けつけ、前述の猿が川に飛び込んで村人総出で引き上げる。村での牧歌的な風景が映し出されて、タンポポの綿毛が媒介項（タンポポの綿毛が落下傘部隊に見立てられる）となり、舞台は村から南方の島へと転換する。

南の島の海岸の風景が映し出される。見張りの双眼鏡から見える先に、「海軍設営隊本部」という看板が出て、攻撃の為の先遣隊が拠点を作る為の設営準備に忙しい。そこで働いているのは勿論動物である。そこへ指揮官である桃太郎が飛行機で到着し、島の動物達に日本語を教える。熊がハーモニカを吹きながら登場し、そのメロディに合わせて五十音順の歌が歌われ、大合唱になる。設営準備が終わると兵士たちの日常生活の一端が描かれ、今度は偵察になる。ここでは被弾して命からがらに還ってきた隊員の口から一名が死亡した事が語られる。この場面が終わると、桃太郎率いる空挺部隊はいよいよ鬼が島への攻撃へと出発する。ここで、これまでの画調とは一転して影絵風のシークエンスが挿入される。内容は南方のゴアの島の王様が白人に騙されて島を奪われるというストーリーであり、このシークエンスの終わりにはジャングルの中の石像が映し出され、その石像に「東方天子の國より白馬にまたがりたる神の兵きたりて、必ずや民族を解放せん」といった内容が刻まれている事が語られる。

そして、落下傘部隊で降下した桃太郎の部隊は敵の兵士を殺戮し、勝利を収める。相手方の代表と会見を行なって全面降伏させ、戦闘は終結。最後に冒頭の村に場面が戻る。前出の子猿達が木の上から落下する遊びをしており、山の姿が映し出されて映画は終わる。

表1 作品データ

	『桃太郎の海鷲』	『桃太郎 海の神兵』
公開	1943（昭和18）年3月25日	1945年（昭和20）年4月12日
上映時間	37分	74分
製作	芸術映画社	松竹動画研究所
演出・撮影	瀬尾光世	瀬尾光世
構成	持永只仁	熊木喜一郎
音楽	伊藤昇	古関裕而（音楽監督） サトウハチロー（作詞）
企画・後援	海軍省報道部（企画）	海軍省（後援）

田中純一郎『日本教育映画発達史』（蝸牛社、1979年）、登川直樹ほか『講座アニメーション2 世界の作家たち』（美術出版社、1987年）などを元に作成。なお、『桃太郎 海の神兵』は実際のフィルムのタイトル部分では『海の神兵』のみの表記である。

表2 『朝日新聞』（大阪版）における『桃太郎の海鷲』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	イラストの図案
1943. 3. 13	夕刊2面	日本最初の長篇漫画 お子様いつでも見られます 昭和の桃太郎ハワイ大爆撃	飛行機に跨る桃太郎
1943. 3. 19	夕刊2面	日本最初の長篇マンガ！ 昭和の桃太郎部隊にかかゝては 鬼畜米国のヤツパラもザツトこの通り！	ポパイ、猿、飛行機
1943. 3. 21	夕刊2面	日本最初の長篇漫画 これは凄い！素的（ママ）だ！と思はず感嘆の言葉出る程面白いマンガ！	射撃する狐（兎？）
1943. 3. 23	夕刊2面	これは凄い！見事だ！笑ひと感激の決戦番組！ 是非共お子様の教材に お父様の慰安に！	桃太郎
1943. 3. 24	夕刊2面	大人の見るマンガ！素的（ママ）だ！痛快だ 元気一ぱい笑ひのカンヅメ！ 日本最初の長篇漫画！	桃太郎（顔のみ）
1943. 3. 25	夕刊2面	陽春随一！笑ひと感激の決戦番組 坊チャン嬢チャン お家族揃ってぜひ御覧下さい 日本最初の長篇漫画！ 昭和の桃太郎鬼ヶ島真珠湾大行	
1943. 3. 25	夕刊2面	お家族週間	
1943. 4. 1	夕刊2面	日本最初の長篇マンガ	
1943. 4. 8	夕刊2面	日本最初の長篇マンガ！	
1943. 4. 15	夕刊2面	日本最初の長篇漫画！	
1943. 4. 22	夕刊2面	日本最初の長篇漫画	

表3 『朝日新聞』（東京版）における『桃太郎の海鷲』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	イラストの図案
1943. 3. 7	朝刊4面	日本一の長篇漫画完成 昭和の桃太郎・宿敵鬼ヶ島艦隊撃滅に蹶起	桃太郎
1943. 3. 9	夕刊2面	昭和の桃太郎部隊 真珠湾・米鬼艦隊大撃滅 日本一の長篇漫画愈々完成	桃太郎と飛行機二機
1943. 3. 10	夕刊2面	全国少国民の大声援を浴びて桃太郎の大活躍 昭和の桃太郎・宿敵米鬼艦隊撃滅に蹶起！	猿
1943. 3. 12	夕刊2面	ソラ進め、今こそ宿敵米鬼の牙城へ突撃だ！ 真珠湾轟沈！鬼ヶ島空軍大撃滅 桃太郎部隊、月月火水木金の腕前	猿の顔とピストル
1943. 3. 13	夕刊2面	迷利犬製漫画映画撃滅！日本一の長篇漫画映画誕生	桃太郎とポパイ（殴られている）
1943. 3. 14	夕刊2面	漫画映画初めての文部省推薦 真珠湾撃滅の漫画化 御子様の生きた教材として是非御一見をおすすめ致します	豚
1943. 3. 16	夕刊2面	御一家揃って御期待下さい お父さんの御慰安に！お子さまの生きた教材に！	桃太郎と猿（顔のみ）
1943. 3. 17	夕刊2面	真珠湾一瞬にして全滅！日本一の桃太郎、米鬼を震へあがらせる！ こんな素晴らしい漫画映画をルーズヴェルトに見せてやりたい	桃太郎（アメリカ国旗を踏む）
1943. 3. 18	朝刊4面	米鬼虎の子のボーイングB十七もマッシー一本で木っ端みじん！	猿（後姿）と爆破される飛行機
1943. 3. 19	夕刊2面	決戦下、僕もお伽噺の主人公だけでは役不足です、断然、米鬼撃ちてし止まむ に蹶起しました、全国の皆さん御声援下さい！ 日本一の長篇漫画映画	桃太郎の顔（左記は桃太郎の台詞）
1943. 3. 21	夕刊2面	御子様の新入学のお祝ひに 御一家揃って御出かけ下さい	猿（顔のみ）
1943. 3. 23	夕刊2面	全国少国民のお待ち兼ねの長篇映画 今週は是非お父様と御一緒に	猿（顔のみ）
1943. 3. 24	夕刊2面	昭和の桃太郎は決戦下のお子様のお話を浚った大人気 お待ち兼ねの長篇漫画映画	猿と団子
1943. 3. 25	夕刊2面		桃太郎（顔）
1943. 3. 25	夕刊2面	真珠湾撃滅の長篇漫画	桃太郎（顔）
1943. 3. 25	夕刊2面	日本一の長篇漫画	
1943. 3. 27	夕刊2面	勇ましい全国少国民に大人気！ 日本一の長篇映画	桃太郎（顔）
1943. 4. 21	夕刊2面		

表4 『読売報知』における『桃太郎の海鷲』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	イラストの図案
1943. 3. 6	朝刊3面	日本一の長篇漫画完成 昭和の桃太郎・宿敵鬼ヶ島艦隊撃滅に決然蹶起！ 奇想天外！漫画ならではの描けぬ痛快無類の大作戦！	猿の顔（鉢巻きを巻いている）
1943. 3. 9	夕刊2面	昭和の桃太郎部隊：真珠湾・米鬼艦隊撃滅に蹶起！鬼ヶ島大爆撃！真珠湾	桃太郎
1943. 3. 10	朝刊4面	奇想天外！痛快無比の大作戦 宿敵米鬼牙城へ今こそ突撃！ 全国少国民の大声援を浴びて 桃太郎君一生一代のハリキリ★撃ちてし止まむ 日本一の長篇漫画映画	桃太郎、犬、戦闘機
1943. 3. 12	朝刊4面	メリケンもポパイもベティ・ブーブも糞くらへ 迷利犬製漫画映画撃滅！ 十二月八日・真珠湾大空襲の漫画化 日本一の長篇漫画誕生	戦闘機とプルート
1943. 3. 13	夕刊1面	珍作戦続出！桃太郎部隊、月月火水木金金の腕前は？ 真珠湾・轟沈！米鬼艦隊大撃滅！ ソラ進め！宿敵米鬼の牙城へ突撃だ！ 長篇漫画	銃口から狙いを定める猿の顔
1943. 3. 14	朝刊4面	こんな素晴らしい漫画映画をルーズヴェルトに見せてやりたい	桃太郎が米国旗を踏み付けている
1943. 3. 16	朝刊4面	米鬼虎の子のボーイングB十七もマッシー本で木ッ葉みじん！	銃を持つ猿と炎上する戦闘機
1943. 3. 16	夕刊2面	全国のお友達へ 仲良しの皆さん、僕は大東亜戦争に真珠湾撃滅の大空襲をや つて大戦果をあげました。素晴らしいこの戦ひの有様がこんど映画になつて公 開されることになりました。お父さんお母さんお兄さんの方々と御一緒に是非 御覧になつて下さい。桃太郎より 長篇漫画	戦闘機からビラを撒く桃太郎 (左記の内容は桃太郎が撒くビラに書 かれている)
1943. 3. 17	朝刊4面	御一家揃って御期待下さい お父さんの御慰安に！お子様の生きた教材に！	猿、犬、兎、雉（兎以外は日の丸の鉢 巻きをしている）
1943. 3. 19	朝刊4面	決戦下、僕もお伽噺の主人公だけでは役不足です、断然米鬼撃ちてし止まむに 蹶起しました全国の皆さん、御声援下さい。 長篇漫画映画	桃太郎の上半身
1943. 3. 20	夕刊2面	御子様の新入学のお祝ひに 御一家揃って御出かけ下さい 長篇漫画映画	猿
1943. 3. 21	朝刊4面	三月廿五日より 御家族週間 理想的な健全娯楽番組 お父さんには闘ふ護送船団 お子さまには桃太郎の海鷲	猿と雉
1943. 3. 23	朝刊4面		

1943. 3. 24	夕刊 1 面	昭和の桃太郎は決戦下のお子様の大人気！ お待ち兼ね 忠犬ハチ公に劣らぬワン太郎君初陣の武者振り	犬が剣を持って突撃している
1943. 3. 25	朝刊 4 面	全国少国民お待ち兼ねの昭和の桃太郎大活躍！ 漫画が描く奇想天外！真珠湾撃滅の大戦果 全国民必見の実戦映画	桃太郎、猿（顔） 猿は鉢巻きをつけている
1943. 3. 27	朝刊 4 面	お休は健全娯楽で 連日大好評との事僕も嬉しいです。全国のお友達一人残ら ず全部見に来て下さい。桃太郎より	桃太郎
1943. 3. 28	朝刊 4 面		
1943. 4. 7	朝刊 4 面		桃太郎（顔）

表5 『毎日新聞』（大阪版）における『桃太郎の海鷲』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	イラストの図案
1943. 3. 16	夕刊2面	坊ちゃん 嬢ちゃん 是非御覧下さい。 昭和の桃太郎部隊 鬼ヶ島大爆撃 鬼ヶ島はハワイだ！赤鬼！青鬼！は米英だ！ 日本初の長篇漫画！	爆撃する飛行機、沈む戦艦
1943. 3. 20	夕刊2面	漫画映画に始めての！文部省推薦 坊ちゃん嬢ちゃんの御進級、御入学のお祝ひに！ 御家族揃って是非御覧下さい！ 昭和の桃太郎は飛行機で痛快無比のハワイ真珠湾大爆撃！ 日本最初の長篇漫画	桃太郎の顔
1943. 3. 23	夕刊2面	大人の見るマンガ 素敵だ！痛快だ！元気一ぱい 笑ひのカンズメ！	
1943. 3. 24	夕刊2面	笑ひと感激の決戦番組 春一番のお楽しみ御家族総動員で！	桃太郎
1943. 3. 25	夕刊2面	春一番！笑ひと感激の決戦番組 桃太郎鬼ヶ島真珠湾大爆撃 坊ちゃん！嬢ちゃん！お家族揃って御覧下さい	桃太郎の顔
1943. 3. 31	夕刊2面	日本一の桃太郎が本物の犬や猿雉子を連れて鬼ヶ島へ	桃太郎の顔
1943. 4. 1	夕刊2面	凄い人気です！愉しいお家族週間！	
1943. 4. 8	夕刊2面	絶賛！大好評のお家族週間！ 日本最初の長篇漫画	

表6 『毎日新聞』（東京版）における『桃太郎の海鷲』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	イラストの図案
1943. 3. 8	朝刊4面	昭和の桃太郎部隊 ダイトウアセンカダイカツヤク 決然蹶起 日本一の長篇漫画愈々完成	桃太郎の上半身
1943. 3. 9	夕刊2面	昭和の桃太郎部隊：真珠湾・米鬼艦隊大撃滅！ 日本一の長篇漫画完成	桃太郎の顔、戦闘機二機
1943. 3. 10	朝刊4面	赫々たる大戦果の蔭に血の滲むこの大血戦！	桃太郎の顔
1943. 3. 11	夕刊2面	撃ちてし止まむ 真珠湾轟沈！米鬼空軍大撃滅 日本一の長篇漫画愈々完成	桃太郎の顔と戦闘機二機
1943. 3. 12	朝刊4面	珍作戦続出 桃太郎部隊の月月火水木金の腕前は？	猿の顔と銃
1943. 3. 13	朝刊4面	迷利犬製漫画映画撃滅！ 日本一の長篇漫画誕生！	狐とポパイ
1943. 3. 14	朝刊4面	真珠湾撃滅の漫画化 お子様の生きた教材として是非一見をおすすめします	狐と戦闘機
1943. 3. 16	朝刊4面	御一家揃って御期待下さい お父さんの御慰安に！お子様の生きた教材に！	外人兵と沈没する戦艦
1943. 3. 16	夕刊2面	こんな素晴らしい漫画映画をルーズヴェルトに見せてやりたい 全国少国民お待兼ねの長篇漫画映画	戦闘機から銃を撃つ狐、別の戦闘機
1943. 3. 17	朝刊4面	決戦下僕もお伽噺の主人公だけでは役不足です断然米鬼撃ちてし止まむに蹶起し ました全国の皆さん御声援下さい。 長篇漫画映画	桃太郎の上半身と工具
1943. 3. 19	朝刊4面	御子様の御入学のお祝ひに 長篇漫画映画	雉の顔
1943. 3. 20	朝刊4面	真珠湾・鬼ヶ島艦隊全滅にルーズヴェルト悲鳴をあげる 素晴らしい長篇漫画映画	
1943. 3. 23	朝刊4面		
1943. 3. 24	朝刊4面	お子様の人気を浚った 桃太郎の海鷲 日本一の長篇漫画映画 昭和の桃太郎は決戦下のお子様の大人気！ お待ち兼ね 忠犬ハチ公に劣らぬワン太郎君初陣の武者振り	犬と雉の顔
1943. 3. 25	朝刊4面	今週は理想的な健全娯楽番組 漫画が描く奇想天外！真珠湾撃滅の大戦果 全国少国民お待兼ね映画	桃太郎の上半身
1943. 3. 26	朝刊4面	この春休みは桃太郎さんと一緒に 文部省推薦の長篇漫画映画！	桜の木と猿の顔
1943. 3. 26	朝刊4面		桃太郎の顔
1943. 4. 8	夕刊2面		

表7 『朝日新聞』（大阪版）における『桃太郎 海の神兵』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	扱い
1945. 4. 12	朝刊 2面	鬼ヶ島よりまだいアメリカ兵をやっつける！ さてこそ桃太郎の出陣だ！	
1945. 4. 19	朝刊 2面	大人も喜び子供も喜ぶお家族向きの傑作マンガの登場だ！	長篇戦記漫画映画
1945. 4. 26	朝刊 2面	マンガが茲迄水準を高めた日本漫画映画の傑作です！	
1945. 5. 3	朝刊 2面	美しい詩情溢るゝ松竹呂漫の傑作長編漫画	

表8 『朝日新聞』（東京版）における『桃太郎 海の神兵』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	扱い
1945. 1. 25	朝刊 2面	みんなが待った長篇漫画登場	長篇戦記漫画映画
1945. 1. 30	朝刊 2面	南海に咲き開いたマンガ落下傘兵	長篇戦記マンガ
1945. 3. 9	朝刊 2面	桃太郎空挺部隊に出撃の命下る！	松竹長篇戦記マンガ映画
1945. 3. 18	朝刊 2面	パッと開いた桃太郎部隊の落下傘！封切迫る	長篇戦記マンガ映画
1945. 3. 23	朝刊 2面	偉風堂々四邊を拂って桃太郎サンの登場！	長篇マンガ
1945. 3. 31	朝刊 2面	お家族向きの傑作マンガ 封切迫る	松竹戦記マンガ映画
1945. 4. 3	朝刊 2面	大人も喜び子供も喜ぶ！こんな素晴らしいマンガは餘り見られません！	松竹長篇戦記漫画映画
1945. 4. 5	朝刊 2面	お家族向きの傑作マンガいよいよ白系十二日封切	松竹長篇戦記漫画
1945. 4. 8	朝刊 2面	日本マンガ映画の凱歌！誰が見ても絶対楽しい松竹自慢の長篇傑作マンガ	
1945. 4. 9	朝刊 2面		
1945. 4. 12	朝刊 2面		
1945. 4. 15	朝刊 2面	楽しいお家族向きの傑作マンガ！絶賛白系上映中	松竹長篇戦記マンガ
1945. 4. 19	朝刊 2面		

表9 『読売新聞』における『桃太郎 海の神兵』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	扱い
1945. 1. 25	朝刊 2面	みんなが待った長篇漫画登場	長篇戦記漫画映画
1945. 3. 7	朝刊 2面	南海に咲き開いたマンガ落下傘兵	長篇戦記マンガ
1945. 3. 11	朝刊 2面	桃太郎空挺部隊に出撃の命下る!	松竹長篇戦記マンガ映画
1945. 3. 19	朝刊 2面	パッと開いた桃太郎部隊の落下傘! 封切迫る	長篇戦記マンガ映画
1945. 3. 23	朝刊 2面	偉風堂々四邊を拂って桃太郎サンの登場!	長篇マンガ
1945. 3. 24	朝刊 2面	お家族向きの傑作マンガ 封切迫る	松竹戦記マンガ映画
1945. 3. 28	朝刊 2面	大人も喜び子供も喜ぶ! こんな素晴らしいマンガは餘り見られません!	松竹長篇戦記漫画映画
1945. 4. 5	朝刊 2面	お家族向きの傑作マンガいよいよ白系十二日封切	松竹長篇戦記漫画
1945. 4. 6	朝刊 2面	日本マンガ映画の凱歌! 誰が見ても絶対楽しい松竹自慢の長篇傑作マンガ	
1945. 4. 7	朝刊 2面		
1945. 4. 9	朝刊 2面		
1945. 4. 11	朝刊 2面	楽しいお家族向きの傑作マンガ! 絶讚白系上映中	松竹長篇戦記マンガ
1945. 4. 14	朝刊 2面		
1945. 4. 15	朝刊 2面		

表 10 『毎日新聞』（大阪版）における『桃太郎 海の神兵』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	扱い
1945. 4. 12	朝刊 2 面	海の神兵 現はれたマンガのV2号！ 練りに練った松竹秘策の長篇マンガ公開！	長篇戦記漫画映画
1945. 4. 19	朝刊 2 面	昭和の英雄桃太郎さん！マンガに見る君達の姿	長篇戦記漫画映画
1945. 4. 26	朝刊 2 面	大人も子供も喜ぶ長篇戦記漫画！	松竹漫画
1945. 5. 3	朝刊 2 面	美しい絵画調の溢るる傑作漫画	松竹漫画映画
1945. 5. 10	朝刊 2 面	みんな観て面白い傑作	長篇漫画映画

表 11 『毎日新聞』（東京版）における『桃太郎 海の神兵』の広告内容

日付	掲載紙面	宣伝文句	扱い
1945. 1. 28	朝刊 2 面	鬼ヶ島大狼狽 マンガ落下傘部隊突如敵陣地を奇襲！ オモシロいく全九巻のマンガ映画	松竹長篇マンガ
1945. 3. 10	朝刊 2 面	轟々と爆音高くマンガ空挺部隊の殴り込み！ 南海に咲き開いたマンガ落下傘兵	松竹長篇戦記マンガ映画
1945. 3. 18	朝刊 2 面	怒りに燃えるマンガ部隊の進撃	松竹長篇戦記漫画映画
1945. 3. 23	朝刊 2 面	偉風堂々四邊を拂って桃太郎サンの登場！	長篇マンガ
1945. 3. 24	朝刊 2 面	誰が見ても大喜び！お家族向きの傑作マンガ！	松竹長篇戦記マンガ映画
1945. 4. 7	朝刊 2 面	いよく 白系十二日封切	松竹長篇戦記漫画
1945. 4. 8	朝刊 2 面	大人が見ても絶対楽しい松竹自慢の長篇傑作マンガ！	
1945. 4. 10	朝刊 2 面	お家族向きの傑作マンガ 日本マンガ映画の凱歌！誰が見ても絶対楽しい松竹自慢の長篇傑作マンガ	松竹戦記マンガ映画
1945. 4. 12	朝刊 2 面		
1945. 4. 14	朝刊 2 面	面白い！笑ってためになる傑作マンガ！	松竹長篇戦記マンガ
1945. 4. 19	朝刊 2 面		



図1 『朝日』(東京)

1943年3月9日



図2 『毎日』(大阪)

1943年3月16日

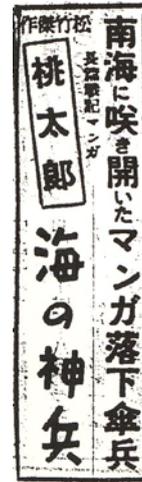


図3 『朝日』(東京)

1945年1月30日

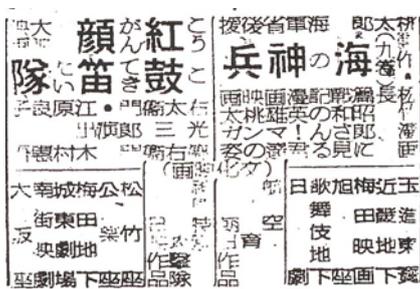


図4 『毎日』(大阪) 1945年4月19日

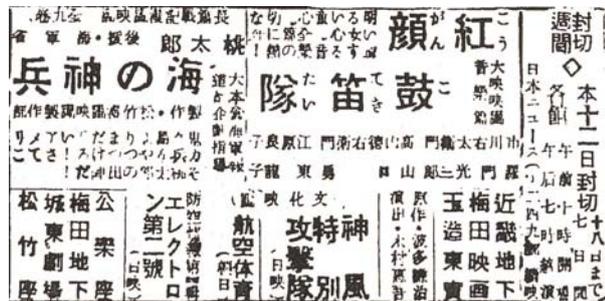


図5 『朝日』(大阪) 1945年4月12日

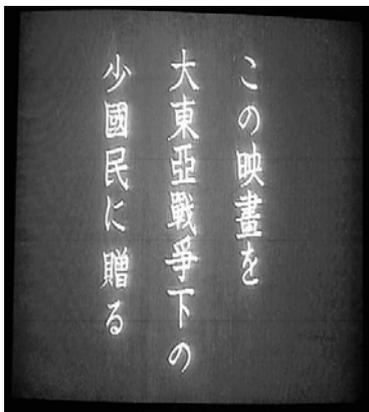


図6



図7



図8



図 13 『アサヒグラフ』1942年2月25日

